

## 「わがまち協働大賞シンポジウム ミニ座談会」（第1弾）まとめ

開催日：令和8年8月18日（火）

登壇者：楠神渉氏、築山清美氏、藤澤彰祐氏、村田淳子氏

進行：事務局（まちづくりネット東近江 森下事務局長）

出席者：小島秋彦氏、小島淳司氏、藤一道氏、まちづくり協働課

### ① 「東近江市協働のまちづくり条例」と「わがまち協働大賞」の誕生

- ・協働のまちづくり条例は、当時の西澤市長の肝いりで始動。骨格完成の途中で小椋市長へ交代し、存続が危ぶまれたが、最終的に条例制定
- ・小椋市長は就任後の挨拶で「民間に頼るのは行政の役割放棄」と本音を吐露したが、その後現場を回るうちに考えを改めた。
- ・市民協働推進委員一期生の楠神氏は議論を重ね、「共に汗をかくこと」（上・下・出資関係を問わず目標に向け共に動く）との定義に到達

### ② わがまち協働大賞 審査の舞台裏

- ・初年度から67件の応募。審査の分担案を委員全員が拒否し、全件を自分たちで審査
- ・書類審査に加え応募団体ヒアリングを実施。自らを「応援団」として、点数以上に対話を重視し、深夜まで議論することもあった。
- ・評価軸はあるが、数値化できない主観やエピソードを重視。ヒアリングでは職員が口を挟まず、委員の意見を尊重

### ③ ラウンドテーブル（まちのわ会議）の誕生

- ・忘年会での雑談から沖縄県視察が決定。自費で二泊三日、沖縄式円卓会議を視察
- ・「準備で成否の8割が決まる」という設計思想に感銘を受け、東近江市版を協働推進委員会からスピンアウトさせ設立
- ・現在は沖縄式に限らず進化し、地域からのオファーに応じ多様な形で開催

### ④ 実践例：バス停設置プロジェクト

- ・視覚障害のある築山氏の「バス停に目印がない」という困りごとを題材に実践
- ・反対者は誰もいなかったが、近江鉄道（バス）→農協（土地所有者）→警察などの調整を経て設置まで1年半を要した。
- ・「困りごとは原因を一つずつ潰せば解決できる」ことを実感

### ⑤ 「協働とは何か」をめぐる議論

- ・楠神氏：「共に汗をかくこと」
- ・築山氏：「各自の才能が発揮され、合わさっている状態」
- ・藤澤氏：無自覚な協働こそ素敵。規模の拡大や内容の深化は、自然と協働を要請する。
- ・村田氏：「協働」という言葉自体が伝わりにくく、実態が言葉より先行している。

- ・ 共通認識：協働は目的ではなく、何かを成し遂げようとした結果として生まれる手段であり、協働大賞はその可視化・称揚の場

## ⑥ 「助けて」と言い合える社会へ

- ・ 「困ったら誰かに頼る」という発想自体を持たない人も多く、おせっかいな人による最初の一押しが重要
- ・ 築山氏は盲導犬同伴で入店を断られる経験を重ね、「断られても感謝で終える」姿勢を夫婦で訓練
- ・ 80 人いる講演会の場で「助けられる人」は全員挙手した一方、「助けてと言える人」は挙手が無かったという逸話が象徴的
- ・ 「コーディネーター賞」のように、気軽に橋渡しする人の存在が協働の入口を広げる。

## ⑦ 多文化・国際交流の中の協働

- ・ 外国人向けのラウンドテーブルから、食を通じた交流会・インターナショナルフェスティバルへ発展
- ・ ブラジル学校からの「本音と建前が分からない」という声など、招待の社交辞令をめぐる文化差エピソードを共有
- ・ インターナショナルフェスティバルでは、誰も全体を把握しないまま進行したことが、かえって各ブースの個性と「ザ・協働」な空気を生んだ。

## ⑧ 印象的な言葉

- ・ 楠神氏：「共に汗をかくこと。上下関係やどちらがお金を出すかということではなく、共に汗をかいて目標に向かって進む。」「「隣の人が助けてと言ったら助けてあげられる人」は全員が手を挙げたのに、「自分から助けてと言える人」はいなかった。」
- ・ 藤澤氏：「本人たちが協働だと思っていなくても、何か「働いている」という意識すらなくてもいい。福祉的な分野になればなるほど、本人が意識していないほうが素敵。」
- ・ 築山氏：「断られても「残念ですが、また他を探します。ありがとうございます」と言えるようになった。助けてと言っても大丈夫なんだと思えるように。」

## ⑨ まとめ

10 年間「協働とは何か」を問い続けた登壇者が共通して辿り着いたのは、協働は目的ではなく、何かを成し遂げようとした結果として自然発生するものであり、それを可視化・称揚するのが協働大賞の役割だという認識であった。協働の入口として最も重要なのは「助けてと言える・言ってもいい」という文化の醸成であり、おせっかいなコーディネーターが最初のつなぎ役を担うことで、自覚なき協働が地域全体に広がっていくというものであった。

## 資料 2

### わがまち協働大賞シンポジウム協議資料

- 日時 令和 8 年 11 月 28 日（土）午後 1 時 30 分から午後 4 時まで
- 場所 能登川コミュニティセンター ホール
- 共催 東近江市市民協働推進委員会、まちづくりネット東近江、東近江市
- 内容 午後 1 時 30 分 開会・挨拶・趣旨説明（10 分）
- 午後 1 時 40 分 パネルディスカッション（50 分）
- テーマ：地域に必要な協働の形
- コーディネーター：深尾昌峰氏（市民協働推進委員長）
- 登壇者：株式会社 I H I
- （協働大賞受賞・企業、市民団体と行政との協働）
- 学生カフェ F I K A
- （協働大賞受賞・若者たちの活動）
- N P O 法人喜里 藤井美智代氏
- （協働大賞受賞者・第 2 弾ミニ座談会登壇者）
- 五個荘地区まちづくり協議会 田島宏氏
- （協働大賞受賞者・第 3 弾ミニ座談会登壇者）
- 午後 2 時 30 分 休憩（10 分）
- 午後 2 時 40 分 ワールドカフェ（70 分）
- メインファシリテーター：森下瑠美氏（まちづくりネット東近江）
- テーブルファシリテーター：市民協働推進委員、まちづくり  
（書記・問い役） ネット東近江、まちづくり協働課
- 問いかけ：3 問程度
- 午後 3 時 50 分 講評・閉会（10 分）
- 深尾昌峰氏（市民協働推進委員長）

## 今後の「共に考え、共に創る」わがまち協働大賞について

～これまでの協議内容より～

### 論点①：「応募数を追うことの是非」と「過去の受賞事例をどう再評価し、ヨコ展開していくか」

【現状と課題】近年は毎年の応募数が減少傾向にあるが、新しく生まれる活動の開拓に偏るのではなく、これまでに受賞した活動を改めて見つめ直す。

#### 【今後に向けて】

- ・過去の受賞団体を「再評価」して次のステップへ後押しする応援の手法は何か。
- ・すでに結果を出した活動だけでなく、過去の受賞団体を再評価・応援するための新しい部門や表彰手法を新しく導入すべきか。

### 論点②：受賞事例の「他地域・他団体への広がり」と活用のあり方

10年間で蓄積された141の優れた活動は地域の共通の財産であるが、一過性の表彰や記録に留まっている懸念がある。

【現状と課題】受賞事例の知恵が他の地域へ十分に伝わっておらず、類似の地域課題を抱える地区がゼロから手探りで活動を立ち上げている状況。

#### 【今後に向けて】

- ・他地区のまちづくり協議会や市民団体が「自分たちの地域でも応用できるお手本」として優しく学び合える、相互学習の仕組みをどう構築すべきか。
- ・単なる「活動の記録」ではなく、次の活動を誘発する生きた道具として活用してもらうための工夫は何か。

### 論点③：活動の「裏側」を届ける情報発信のあり方

「完成された立派な成果」ばかりがアピールされると市民にとって敷居が高く映り、応募を躊躇させる要因になり得る。

【現状と課題】表彰式や事例紹介では泥臭い苦労や些細なきっかけが見えにくい。

#### 【今後に向けて】

- ・「資金不足をどう乗り越えたか」「役割分担でどうぶつかり合ったか」といった、人間味あふれる「過程の物語（ストーリー）」をどう切り出し、発信していくべきか。
- ・インターネットなどを活用してこれらを伝える際、市民（特に若い世代）に関心を持てるような見せ方の工夫は何か。

### **論点④：受賞者の「誇り」と現地ヒアリングの「熱量」の循環**

表彰の価値を高め、活動の継続を支援するとともに、各委員が受けた現地ヒアリングの熱量をどう還元していくか。

**【現状と課題】** 受賞がその時限りのイベントで終わっており、選考過程（現地視察）で生まれた「応援したいという凄まじい熱量」が、選考室内だけに閉じ込められている。

#### **【今後に向けて】**

- ・ 受賞したことが地域からの「信頼の証（勲章）」となり、新たな仲間集めや次の資金獲得の武器になるような、賞の価値向上策は何か。
- ・ 現地ヒアリングの熱量を口コミや委員からの講評コメント等を通じて、広く市民全体へ発信し、応援の輪を広げるための仕組みをどう構築すべきか。

#### **・・・「わがまち協働大賞シンポジウム」（11月28日開催）との接続**

パネル討議や、テーブルを替えながらお茶を片手に和気あいあいとおしゃべりする「対話の場（ワールドカフェ形式）」を通じて多様な意見の拾い上げ